
雪の花

春野天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の花

【Nコード】

N3024A

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

ダリルとエリーとサムは、旅の途中、ある村を訪れる。そこには『雪の花』の丘があり、全ての花が咲くと雪が降り始めるという。しかし、今年はまだ『雪の花』は咲かず、雪は全く降っていないかった。エリー達は『雪の花』を咲かせようと試みる……「魔法使いのいない国」のクリスマスにむけた続編です。

雪の花 前編

山一面に真っ白い小さな花が咲き誇ると、
今年も村に初雪が降る

清楚で可憐なその花は、

冬の訪れを人々に告げる

山に咲いた白い花々は、

まるで降り積もった雪のように見える

花が全て咲いた頃、

空から雪が降り始め、村全体を白銀に変える

そして、

今年も雪のクリスマスが訪れる……

「うう、寒い。今にも雪が降りそうだな」

黒いマントの襟元を閉め身震いしながら、ダリルはどんよりと曇った冬の空を見上げた。

（僕、雪を見たことないんだ。降ってくれたらいいのになあ）

サムは、少し大きくなった子猫を胸に抱える。今ではエリーにも
楽に心の声が聞こえるようになり、耳の聞こえないサムと三人でい
る時は、心で話していた。第三者から見れば誰も何も喋っていない
のだが、お互いの心は通じ合っていた。

（私も雪は見たことないわ。ノースウィンドウには雪が降らないか
ら）

（へえ、『北風』という国名なのに？）

ダリルはフフツと笑う。

（北風はよく吹くのよ。でも、昔から雪は降らない気候らしいの）

（北風がビュービュー吹いて寒いだけ、その後に真っ白な銀世界の
ご褒美がないとは、つまらない国だ）

（つまらない国で悪かったわね。雪が降らないから助かってること

も多いんだから)

故郷の悪口に、エリーは口をとがらせる。

(それはそうだが、君だって雪を見たいんだろ?)

(それは、もちろん)

(もうすぐ到着する、スノーヴィレッジという村は、一面現世界の美しい村だ。雪なんて飽き飽きするほど降り積もっている)

(本当に!? 雪が積もってるの!)

サムは満面に笑みを浮かべ、子猫を抱えあげて飛び跳ねた。

(……雪が積もってる? でも、まだ全然雪なんて見えないわ)

遙か前方を見渡しても、雪の気配は感じなかった。遠く広がる山脈も雪の帽子をかぶっていない。

と、曇った空に一羽のカラスが現れた。カラスはカアと鳴きながらゆっくりと近づいてくる。

(カラス君のお帰りのようだ。カラス君が先に村を偵察して来たんだ)

ほどなく、カラスはダリルの元まで降りてきて、その肩にちょこんととまった。

「村の様子はどうだった?」

ダリルが聞くとカラスは小さく鳴いて、首を傾げた。

「ここがスノーヴィレッジ?……」

一足先に村に入ったエリーとサムは、村の入り口で立ち止まる。

「ゆきはどこにもつまっているの?」

サムは、声に出して驚いた。ダリルの話では、辺り一面銀世界のはず……しかし、雪は全く積もっていない。空からは雪のかけら一つ舞い降りてこなかった。

「今年はまだ雪が降っていないらしい」

カラスが観てきた様子を心で感じ取っていたダリルは、少し遅れて歩いて来た。

「あなたの話では、飽き飽きするほど雪が積もってるはずでしょ?」

エリーは、がっかりしているサムの肩に両手を乗せる。

「ウソなの？」

「いいや、今まで偉大な魔法使いのダリルが、ウソをついたことがあるかい？」

ダリルはエリーを見つめて、ウィンクする。

「ますますウソっぽいわ……」

エリーは軽く息を吐く。吐く息は白い。気温はかなり低くなっていた。

「それより早く行きましょ、凍えそうよ。今夜の宿を見つけて温かいお風呂に浸かりたいわ」

エリーはサムを連れ、村に入っていく。

「おかしいな……もう雪の花は咲いているはずなのに」
ダリルは村を見渡しながら、ゆっくりと後に続いた。

村に一軒だけある小さな旅の宿屋には、旅人の姿もなくエリー達三人の貸し切り状態だった。

「うーん、寒い日の温かいミルクほど美味しいものはない」

ダリルは出されたホットミルクを一気に飲み干した。

「もう一杯、お代わりをおくれ」

「あなたって、本当にミルク好きよね」

エリーはカップで手を温めながら、湯気の立つミルクを口に含む。

「このミルクおいしいよ。ぼくもおかわり」

サムは殻のカップを持ち上げ、宿屋の人に声に出して言った。

「あ、ほんと……とっても甘いわ」

エリーはゆっくりと味わって飲み込んだ。

「君が入れてくれたミルクも悪くなかったが、田舎の新鮮なミルクにはかなわないな」

「気に入っていただけで良かったです」

宿屋の女性がポットに入ったミルクを運んできて、ダリルとサムのカップを満たした。色白で金髪の長い髪を束ねた美人だった。

「あなたが入れたミルクは、特別に美味しい」

ダリルは美女にウィンクすると、ゆっくりとミルクを口に含んだ。……また始まった。エリーは冷ややかな視線をダリルに送り、カップをテーブルに置いた。この数ヶ月ダリルと旅を続けているが、ダリルは行く先々の美女達に優しくいつもまわりを美女に取り囲まれていた。気にしなければいいのだが、どうしても気になるエリーだった。

「そんなことを言っっては、恋人に悪いですよ」

美女はニコリと笑って、ダリルをたしなめる。

「恋人なんかじゃないです！……ただの旅の仲間ですから……」

思わず大きな声を出し、エリーは頬を染める。

「確かに、僕とエリーはそういう関係じゃない。一度もしとねを共にしたことはないからね」

ダリルはフフツと笑った。

「僕は魔法使いダリル。彼女はその弟子エリーで、彼はエリーの弟のサムだよ」

「まあ、魔法使いの方々なんですか？ 私はリアと言います。この宿を夫と営んでます」

リアは皆に笑顔を向けた。

「ダリルさんは素敵な方ですね。私に夫がいなければ、恋をしてしまいそうです」

「リアさん、そんなことを言っってはダメですよ。ダリルはすぐにつけあがりますから、魔法使いといってもダリルもまだ見習いの身です」

エリーは頬を膨らませて、キツパリとそう言った。

「エリーさんは可愛いわ。私には2人はとてもお似合いの恋人に見えました」

リアは穏やかに微笑む。

「では、さっそくお料理を用意して来ますね」

「その前に一つ聞きたいことがあるのだが……」

奥に行こうとしたリアに、ダリルが声をかける。

「ここスノーヴィレッジ は雪が美しい村、この時期なら大勢の人々で賑わっているはずなのに、旅人は誰一人いない。それに雪が降っていないのは何故だね？」

「……それは」

リアは顔を曇らせ言葉を切る。

「今年はまだ雪の花が一輪も咲いていないからです……」

宿屋でゆつくりと食事を取り、温かなお湯に浸かった後、ダリルとエリーはリア夫妻の部屋を訪れた。サムはカラスやネコと一緒に、先に部屋で休んでいた。

リアの夫はヒースといい、30才くらいの落ち着いた男性だった。結婚して3年くらいだそうで、子供はまだいない。

「雪の花のことを聞きたいんだが」

簡単な挨拶の後、ダリルが口を開いた。

「今年に限って咲かないというのは、何か理由があるのかい？」

「きつと、花に与える肥料のせいだと思いますよ。毎年夏の終わり頃から花に肥料を与え始めるんですが、今年はいつもの肥料は使わなかった」

ヒースは静かな口調で言った。

「いつもの肥料にしなかったのは何故ですか？」

エリーも次第に『雪の花』に興味を持ち始めていた。

「……ゼルダおばあさんが寝込んでいるからです」

リアが暗い顔をして答えた。

「ゼルダというのは、私の祖母で90才になります。去年までは元気だったのですが、今年の春頃から体調を崩してずっと寝たきりなんです。意識もあまりないような状態で……『雪の花』の肥料はずつとゼルダおばあさん一人で作っていたもので、誰も正確な作り方を知らないんです。ゼルダおばあさんの具合が急に悪くなったので、肥料の作り方を教えてもらうことも出来なくて……」

リアはうつむく。

「90というのかなりの高齢だな。寝付いてしまったのも、病気ではなく年のせいかもしれない……肥料作りはもっと早く受け継いでいた方が良かったんじゃないか？」

ダリルは冷静に言う。

「はい……でも、ゼルダおばあさんはとても元気で、ちょっと頑固なところもありましたから、なかなか教えてもらえなかったんです。ゼルダおばあさんは、小さな頃から『雪の花』と共に育ち『雪の花』を自分の分身のように思っていました。花をとても可愛がっていて、子供や孫の私にさえも簡単には花の世話をさせてもらえなかったんです」

「ふうん、そういうことか。だが、困ったものだ。何とかゼルダさんから肥料の作り方を教えてもらわないと、『雪の花』は二度と咲かないことになる」

「と言うことは、この村には二度と雪が降らないの？」

エリーはダリルに目を向けた。

（治癒の魔法でなんとかならないかしら？）心の声で問いかける。

（さっきも言ったように、ゼルダは病気ではないよ。多分寿命だ。魔法が効くとは限らない）

ダリルは緑色の瞳でじっとエリーを見つめた。

（少しやり方を変えて見れば、効くかもしれないわ）

「リアさん、明日ゼルダさんに会わせて下さい。私たちの魔法でゼルダさんの意識が戻るかもしれません」

エリーはダリルの返事を待たずに、答えた。

雪の花 中編

翌日の朝。

ダリルとエリーは、さっそくリアに案内されてゼルダの元へ向かった。ゼルダは、リア達の宿屋からそう遠くないリアの実家に住んでいた。

「君はいつも感情に走り、冷静さを欠くようだね」
リアの馬車に揺られながら、ダリルは言った。

「軽はずみなことを言い皆に期待させて、魔法が効かない場合はどうするつもりだい？」

「そんなこと……やってみなきゃ分からないわ」

エリーは、だいぶ使い慣れてきた魔法の杖を手に握る。

「なんとかなるっていうのか？」

ダリルは小さく笑う。

「そうよ」

エリーはダリルから視線を外す。エリー自身確信はもてなかったが、偶然立ち寄った村の人々の問題を放っておくことは出来なかった。ゼルダの意識が戻らず、雪の花が咲かなかったとしても、やるだけのことはしたかった。

「ま、僕も出来るだけ協力はしよう。この村で雪の花が咲き美しい雪景色を見てみたいからね」

エリーはダリルに心を読まれないよう心を空白にしていたが、エリーの気持ち達がダリルには分かるようだ。エリーは少し安心した。

真っ白いふわふわのベッドの中で、ゼルダはスヤスヤと安らかに眠っていた。白髪の高い髪。深く皺の刻まれた顔。痩せた体。意識がないと言っても、頬にはほんのりと赤みがさし、穏やかな気持ちの良さそうな寝顔だった。

エリーはそっと掛け布団をめくって、ゼルダの体に両手をかざし

てみた。弱いが確かな生命の温もりを両手に感じる。

「やはり、病気ではないようだな」

エリーの様子を見て、ダリルは呟いた。

「どうにか意識を取り戻すことは出来ないかしら？ ゼルダさんの意識が戻れば、雪の花の肥料の作り方を聞けるわ」

「聞き出して、君が肥料を作ろうというのかい？」

「ええ。私、薬草の煎じ薬を作るのには自信があるわ」

「煎じ薬と『雪の花』の肥料とは、別物だと思うがね。それに、君の煎じ薬が名薬かどうか」

「ダリル、手を貸して。2人で魔法をかければ効き目があがると思うわ」

エリーはダリルの言葉をさえぎり、治癒の魔法をかけ始める。

「君の肥料で雪の花を枯らしてしまわないよう気をつけなくてはいいけないよ」

ダリルはフツと笑うと、魔法の言葉を唱えゼルダに手をかざした。

ゼルダの家を出た後、ダリルとエリーは箒に乗り、雪の花が咲くというなだらかな丘まで飛んできた。治癒の魔法をかけたゼルダは、前より元気そうな顔つきになってきたが、意識はまだ戻っていない。時間が経てば目覚めるかもしれないし、目覚めないかもしれない。ダリルとエリーにもその結果は分からなかった。

丘の上一面に小さな花が植えられていた。だが、どの花も白く堅いつぼみのままで、花は一輪も咲いていない。丘は薄い緑色一色だ。「ここの花が全て咲くと、丘は真っ白になる。遠くから見ると、まるで雪が積もったようになるんだよ」

丘の上空で箒を止め、ダリルが言った。エリーも遅れてその横に止まる。

「雪の花を見たことがあるの？」

「ああ、昔一度見たことがある」

「雪の花が咲いた後雪が積もったら、花は雪で埋もれてしまうんじ

やない？」

「それが、不思議なことに雪の花が咲く丘には雪は積もらないんだ。この不思議な花には体温があるらしくて、降り積もる雪を溶かすらしいよ」

「そうなの？それじゃ、冬の間ずっと花を見られるのね」

「ああ、雪の花は春が訪れるまで咲き続ける……」

ダリルはそう言うと言と高度を上げ、魔法の杖を取りだして呪文を唱え始めた。

「花に魔法をかけるの？」

エリーは上空のダリルを見上げる。魔法で『雪の花』を咲かせることが出来るならいいのにと、エリーは思う。エリーはまだ花を咲かせる魔法など知らなかった。ダリルが丘に向かって杖を振りかざすと、さわさわっと丘に一陣の風が吹いた。

「あっ、花が揺れてる」

エリーの下で、雪の花達が堅く閉じたつぼみを揺らし始めた。ゆっくりとつぼみの頭を持ち上げ、花を開こうとする。少しずつ花びらが開き、白い花が現れた。しかし、それは一瞬のことで、完全に開ききる前にどの花もまた、花びらを閉じてしまった。

「……やはりダメか」

フーツと白い息を吐き、ダリルはエリーの元まで降りてきた。

「雪の花には魔法が効かないようだ」

「そうみたいね。やっぱり、ゼルダさんに肥料作りを教えてもらうしかないわ。宿に戻りましょ、長くいると凍えそうになるわ」

エリーは身震いする。雪の花の丘は、一段と気温が低く凍り付きそうなほどの寒さだった。

「雪の花の咲く丘には、古くから伝説があるんだよ」

ダリルはゆっくりと箒を進めながら言った。

「満開になった雪の花の丘に男女2人で降り立つと、その2人は永遠に愛し合い固く結ばれるらしい」

「え？」

横に並んで飛んでいたエリーは、ダリルの方に顔を向ける。ダリルはフツツと笑うと、軽くウィンクした。

「さあ、早く帰って温かいミルクを飲まないと、体が固まってしま
う」

ダリルは箒のスピードを上げる。

「あ、待って」

エリーはもう一度雪の花の丘に目を向けた。ダリルの言った「雪の花伝説」のことも気になったが、今は雪の花を咲かせることが大切だ。この丘の花が満開になり雪のように白くなることをエリーは願った。

翌朝。

ベッドの中でグッスリと眠っていたエリーは、部屋のドアを激しく叩く音で目を覚ました。まだ日は昇ったばかり、寝ぼけ眼をこすりながらエリーはゆっくりと体を起こす。

「誰？」

ぼんやりとした頭で、ドアの向こうの気配を感じ取る。ひどく慌てている様子だが、喜びに満ちた感情が伝わってくる。

「エリーさん！ リアです！」

ドンドンと戸が叩かれる。

「ゼルダおばあさんが目覚めました！」

その声のエリーの眠気は一気に吹き飛び、ベッドから飛び降りた。

エリーとダリルがゼルダの家に行った時、ゼルダはベッドに身を起こしていた。白髪の長い髪を束ね、とろりとした眠そうな目をしてエリー達を見つめた。

「誰じゃね。あんたらは？」

低いがしっかりとした声でゼルダは言った。

「ゼルダさん、初めまして。私達は旅の途中の者です。私はエリー、こちらはダリルです」

エリーが言うと、ゼルダは面倒くさそうに2人に目を向けた。

「ああ、眠い…… せっかく気持ち良く眠っていたのに、起こさないでくれ」

ゼルダは大きく欠伸をすると、重い瞼を閉じてウトウトし始める。
「ゼルダおばあさん、まだ眠るのは早いですよ。もう少し起きていませんか？」

ダリルはゼルダの側に寄り、その手を握った。ゼルダは眠い目を開けると、ダリルを見上げる。

「私はばあさんじゃないよ……まだまだ若いんだからね」

「これは失礼。あなたは美しいレディでしたね」

ダリルが微笑んで丁寧にお辞儀をすると、ゼルダは口元を弛めた。
「お前はいい男じゃ。私にはちよつと若すぎるようじゃけど」

ダリルがゼルダの手を握りながら魔法をかけたお陰で、ゼルダの頭はようやくしつかりとしてきたようだ。

「ゼルダさん、教えてもらいたいことがあるんです」

エリー は一歩前に出て、ゼルダに微笑みかける。

「なんじゃね？」

「『雪の花』の肥料の作り方を教えて下さい」

「雪の花？……」

ゼルダは少し考え、ぼんやりと窓の外に目を向ける。

「今年はまだ雪が降っていないのかい？もう冬だというのに」

「今年はゼルダさんが作った肥料を与えていないから、『雪の花』は咲いてないそうです。どうか、肥料の作り方を私に教えて下さい。このままでは『雪の花』は咲かないまま枯れてしまいます」

ゼルダはハツとしてエリーを見つめる。

「それは大変だよ……雪の花が枯れるとこの村に雪が降らなくなってしまう。雪の恵みがなけりゃ、豊かな春は迎えられない。すぐに肥料を作らなけりゃ」

ゼルダはベッドから降りようとするが、体は思うように動かなかった。

「アイタタタ……どうしたんじゃ、体中が痛くてしょうがない」
体の痛みにゼルダは顔を歪める。

「肥料作りはエリーとリアに任せると良いですよ。あなたはゆっくりとベットでくつろいで、肥料の作り方を教えて下さい」

ダリルはゼルダの体をそつとさする。柔らかな温もりがゼルダを包み込み、痛みは徐々にひいていく。

「リアとあんな小娘に『雪の花』の肥料が作れるかねえ？」

ゼルダはダリルを見つめて言う。

「美しく賢みなあなたの手助けさえあれば、彼女達にもきっと出来ますよ」

ダリルはゼルダのシワシワの手を取ると、そつとキスした。

「……お前がそう言うなら、教えてやろうかねえ」

気分の良くなったゼルダは、目を輝かせながら笑った。

（少しやりすぎじゃないの？）

エリーはダリルの心に話かける。

（君はゼルダに焼きもちを焼いているのかい？）

ダリルはエリーを見つめてフツと笑う。

（そうじゃないけど）

エリーは、優しくゼルダを抱きしめるダリルを見てため息をつく。
だが、ゼルダの了解を得ることが出来て、ホッと安心した。

雪の花 後編

エリーとリアはすぐにゼルダの指導を受け、『雪の花』の肥料作りに取りかかった。ゼルダは起きあがることが出来ないので、ベッドの傍らでゼルダの説明を聞き、リアはこれからのためにも書き留めておくため、せっせとペンを走らせた。

魔法の力でなんとか目覚めているゼルダは、しばらくするとすぐに眠りそうになるが、ずっと側にダリルがついているお陰で眠りに落ちることはなかった。ゼルダはすっかりダリルが気に入ったようだ。

肥料の材料集めや手伝いは、村人達も協力して行ってくれた。もう12月になり、クリスマスも後わずか。村人達はなんとしても雪のクリスマスを迎えたかった。

肥料作りを初めて7日目。ようやく肥料は出来上がり、後は乾燥させるだけとなった。

「明日には『雪の花』に肥料を与えられそうね」

広間の暖炉の前に並べた肥料を見ながら、エリーは言った。

「上手く肥料が効いてくれるといいがね」

「ゼルダさんを一人にして大丈夫？一時もあなたを放したくないみたいよ」

エリーはダリルを見て、フフツと笑った。

「魔法が効いているせいもあるが、彼女はよく持ち堪えているよ。どうやら、彼女は僕に恋をしたみたいだね」

「あら、そうなの？」

「ダリル！きて、ゼルダさんがよんでるよ！」

奥の部屋からサムの声がする。今日はサムもカラスとネコを連れて、ゼルダの元に来ていた。

「恋の力は魔法より強いらしい」

ウィンクしてゼルダの元に行くダリルを、エリーは微笑んで見送った。

ダリルがゼルダの元に行くと、ゼルダは穏やかな顔をして窓の外に目を向けていた。

「ゼルダ、お呼びですか？」

ダリルは胸に手をあてて、軽くお辞儀をした。ゼルダはにこやかな顔をダリルに向ける。

「雪は降るかねえ？」

「ええ、きつと。あなたが教えてくれた肥料のお陰で、明日にでも降り始めますよ」

「そうじゃな、あのエリーという小娘もリアと一緒によくやってくれた。私は、毎年真っ白な雪を見るのが楽しみなんじゃ。私が手がけた『雪の花』が咲いて、空から雪が降ってくれることが、何よりの幸せじゃ」

ゼルダは子供のように、顔を輝かせる。

「おばあちゃん、ぼくもゆきをみてみたい」

サムはゼルダの口元を見ながら、声を出して微笑んだ。

「そうじゃ……お前たち若い男に『雪の花』の伝説の話をしておう」

「『雪の花』の伝説？」

ダリルは軽く眉をつり上げて、ゼルダに目を向ける。

「私は昔、伝説のお陰で素晴らしい愛を授かったのじゃよ。お前達に愛する人が出来たなら、ぜひ試してみるといい……」

ゼルダはダリルの手を握ると、ニッコリと笑った。

翌日の朝早く。

エリーとダリルは肥料のたくさん詰まった袋を抱え、箒に乗って『雪の花』の丘にやってきた。一面に咲き誇る『雪の花』は、以前と同じように白く堅いつぼみのままだった。

「ゼルダにかけた魔法の力がきれるのも時間の問題だ。急いで花を咲かせないと」

ダリルはゼルダが目覚めているうちに、ゼルダに雪を見せたいと思った。

「肥料をかけてすぐに花が咲くかしら？」

眼下に広がる『雪の花』を見て、エリーは少し不安になる。

「本当なら、2、3ヶ月の期間が必要よ」

「時間を早めることくらい、魔法の力を借りれば簡単さ。雪の花は咲く。君が作った肥料に問題がなけりゃね」

ダリルはフツと笑うと、箒に乗って移動しながら肥料の袋を上からばらまいていく。エリーも箒の上から肥料をまいていった。一通りまき終わると、ダリルは呪文を唱え『雪の花』に向かって杖を振りかざした。箒で移動しながら、それを何度も繰り返した。

エリーは箒から丘の上に降り立ち、花の様子を観察する。ダリルが呪文を唱えるたびに、肥料は土の中に吸い込まれるように入っていた。

しばらくして、ダリルもエリーの元に降りてきた。

「これくらいでいいだろう。効き目の時間は最高速度に早めておいた」

「早すぎて、雪の花に影響はないかしら？」

まだ何の変化もない『雪の花』を見つめながら、心配そうにエリーが言う。

「僕の魔法の力を信じないのかい？偉大な魔法使いダリルの魔法に狂いがあるはずないだろう」

「そうだいいけど……」

エリーはしゃがんで、そっと『雪の花』に触れてみた。

「あ……なんだか温かいわ」

手に触れた『雪の花』から、エリーはわずかな温もりを感じた。

「そろそろ効いてきたかな？」

ダリルは口元を弛める。

やがて、丘の上一面に咲く『雪の花』達が、微かに揺れ始めた。白く堅いつぼみが徐々に頭を上げ、ゆっくりゆっくり花びらを開き始める。そして、何万本と植えてある『雪の花』がいつせいに花開き、丘を白一色に変えていく。

その美しい光景に、エリーとダリルもしばし言葉を失い見とれていた。

「本当に雪のよう……」

咲き誇った『雪の花』が白く輝き始めた頃、ひとひらの雪が空から舞い降りてきて、エリーの肩に落ちた。

「雪？」

エリーが空を見上げると、厚い雲に覆われた空から次々に雪が舞い降りてきた。

「本物の雪のようだな」

ダリルは手をかざし雪を受けとめる。エリーとダリルの体は、あつという間に白く覆われていった。だが、温かな『雪の花』の上に降る雪は、すぐに溶けていき積もらなかった。

「雪の花をずっと観ていたい、そろそろ帰ろうか。2人とも雪だるまになってしまう」

ダリルはフフツと笑うと、エリーの肩に積もった雪をそつと手で払った。

「あっ……ダリル」

箒に乘ろうとするダリルにエリーは声をかけた。

「何だい？ 君は雪だるまになりたいのか？」

「いいえ。その……伝説の話」

エリーはダリルが話した伝説の話を思い出す。満開になった雪の花の丘に降り立った男女は愛し合い結ばれるという……ダリルに心を読まれないよう注意するエリーだが、自然と頬が赤くなる。

「あの伝説の話？ 君は信じているのかい？」

「ウソだったの？」

とぼけた顔をして笑うダリルをエリーは睨む。

「君が僕と愛し合いたいと思ってくれるとは、光栄だな」

「……ウソで良かったわ!」

エリーはサツと箒にまたがると、ダリルを置いて雪の降る空に飛び立った。次第に遠のいていくエリーの姿をダリルは目で追う。

「少しからかい過ぎたかな……」

エリーはまだまだ感情のコントロールが出来ないとダリルは思う。あれでは、他の魔法使いにすぐに心を読まれてしまう。ダリルは微笑むと、一輪の『雪の花』をそっと摘み取った。

「ま、その方がこっちは動きやすい」

手の中に微かな温もりを感じながら、ダリルは『雪の花』を見つめた。

村は、雪で真っ白に染まっていた。

木々、家々、道、次から次へと降り続く雪のため、全ては雪に埋もれていく。

部屋のベットの从上から、ゼルダは嬉しそうに窓から見える雪を見つめていた。

「ああ、雪じゃ……今年も村に雪が降る。私の『雪の花』が咲いたんじゃない」

ゼルダは夢見心地で、安堵の吐息を吐いた。

「あのエリーという小娘もなかなかやるわ……後はリア達に任せたらいいな」

ゼルダは眠そうな目でそう言うと、瞳を閉じてコックリコックリとし始めた。

「……ダリルは良い男じゃった……」

ゼルダは夢の中に吸い込まれるように、眠っていった。

「ゼルダおばあちゃん? 眠っているの?」

ゼルダの部屋に入って来たリアは、幸せそうな顔をして目を閉じているゼルダに目を向けた。

「おばあちゃん?」

リアが軽くゼルダの体を揺すっても、ゼルダはもう目覚めなかった。

ゼルダは永遠の眠りの中へと落ちていった。しかし、それはとても安らかな眠りだった。

エリー達は、雪のスノーヴィレッジでクリスマスを迎えた。初めての雪のクリスマス。小さな村の温かな人々達と楽しいクリスマスのひとつきを過ごした。そこにはもうゼルダの姿はなかったが、ゼルダが残した『雪の花』は丘一面に咲き誇り、これからずっと咲き続けていくことだろう。

そして、雪が止み青空の見たある日の朝。

ダリルとエリーとサムは、カラスとネコと共に、スノーヴィレッジを旅立った。

（僕、この村すごく気に入ったよ！来年の冬もう一度来たいなあ）

サムは真っ白な雪の道を、キュッキュツと踏みしめていく。

（また来ましよう、リアさんとも約束したから。来年は魔法の力なしで『雪の花』が咲くところを観たいわ）

エリーはサムと心の声で話ながら、並んで歩く。まだ誰も歩いていない雪道に、2人の足跡がついていく。

（ダリルは？）

サムは後ろを振り返るが、ダリルの姿はまだ見えなかった。

（さっき、お店の若い女の人と話していたわ。そのうち来るでしょ）

エリーはそっけなくそう言うと、足を早めた。

しばらくすると、カラスがエリーの元に飛んできた。エリーとサムが上空を見上げると、カラスはカアカアと鳴き、空の上から口に加えていた何かを落とした。それは、ゆっくりとエリーの手元に落ちてくる。

「何？」

エリーの手の中に、リボンで飾られた紙包みがちょこんとおさま

る。

（きっと、ダリルからのクリスマスプレゼントだよ！）

「……」

エリーはゆっくりとリボンをほどき、紙包みを開けた。

「あ？」

それは金色のペンダントだった。丸いペンダントトップには白い花びらが埋め込まれていた。

（この花びら、もしかして『雪の花』？）

「エリー、プレゼントは気に入ってくれたかな？」

声のする方を見上げると、箒に乗ったダリルが浮かんでいた。

「君たちは歩くのが速すぎる。危うく置いて行かれるところだった」

ダリルはフフツと笑うと、箒を降りた。

「ありがとう……でも、勝手に『雪の花』を摘み取るなんて」

「貸してごらん」

ダリルはエリーの手からペンダントを受け取り、エリーの首にかけた。

「何万もの『雪の花』の一本くらい良いだろう。花を咲かせた褒美くらいもらっても良いはずだ」

「エリー、とてもにあってるよ！」

サムはペンダントを見つめながら、声に出して言った。『雪の花』のペンダントはエリーの胸元でキラキラと白く光っている。

「そのペンダントはなくさないように。さて、長居が過ぎたようだから、旅の遅れを取り戻さない」と

ダリルは雪の道を歩き始めた。

（あっ、エリー『雪の花』の伝説って知ってる？）

サムは思い出したように、エリーの心に問いかけた。

（……伝説の話はもういいわ。ダリルから聞いたんでしょ）

エリーはため息をつく。

（違うよ、ゼルダおばあちゃんに聞いたんだ）

（ゼルダさんに？）

（うん。あのね、『雪の花』は、一番大切な人への贈り物なんだって。プレゼントされた『雪の花』をずっと大切にしていると、2人の間は永遠に愛で結ばれるんだって。だから、もし僕達に愛する人が出来たら『雪の花』をプレゼントしなさいってゼルダおばあちゃんと言ってた）

「……」

エリーはペンダントを見つめる。

（ダリルはエリーを愛してるってこと?!）

エリーの胸の鼓動が高まる。

「!……サム、黙ってなさい」

笑顔で見つめるサムの手を掴み、エリーは先を歩くダリルを追う。ダリルは2人の気配を感じると振り返り、微笑んでウィンクした。

「では、参りましょうか?」

そう言っただリルは、そっとエリーの片方の手を取った。エリーは顔を赤らめ、微笑みを返す。胸元のペンダントが太陽の日に反射してキラリと光った。

（ダリル、僕にも愛する人が出来たら、『雪の花』をプレゼントするよ!）

サムはエリーの向こう側から顔を上げ、ダリルにウィンクした。

ダリルとエリーとサムは、手をつなぎ並んで雪道を歩き出す。三人と一匹と一羽の新しい旅が、また始まる……

雪の花 後編（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

約1年ぶりに「魔法使いのいない国」の続編を書くことが出来ました！久々のキャラとの再会が嬉しかったです。（^^）またいつか続編を書くかもしれません。

「魔法使いのいない国」第一部、第二部をまだ読んでいない方は、ぜひ読んでみて下さいね。（長いですが…）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3024a/>

雪の花

2010年10月8日15時16分発行